

新城市川田原古墳群の発掘調査報告Ⅱ

—川田原22号墳—

井 口 喜 晴

1 はじめに

川田原古墳群は、愛知県新城市川田原に存在する古墳時代後期の群集墳である。1968年(昭和43)に、愛知大学歴史学研究室によって、それらのうちの5基が調査されたが、その報告書は未刊のまま、遺物は永らく愛知大学総合郷土研究所の収蔵庫に保管されていた。近年、同研究所の事業として、所内の未整理の考古遺物が全て調査されることになり、すでに一部の成果も発表されている。川田原古墳群については、15、16号墳の調査報告が紀要の前号に掲載されている^①が、本稿はそれに続く、22号墳の調査報告である。

2 川田原古墳群の位置と調査の経緯

古墳群の位置と調査の経緯は前稿でも述べたが、ここではその概要を略記する。川田原古墳群の地籍は新城市川田原字本宮道8の52、53、147、158番地で、新城市の西端部に位置し、豊川市一宮町と境界を接する川田原台地の上に立地する(第1図)。この台地は、本宮山の東南山麓にあたり、豊川右岸に形成された上位段丘が境川の浸食によって形成され、東南方向に舌状に伸びている。古墳群は戦後の1948年(昭和23)には36基が知られ、1972年(昭和47)の愛知県教育委員会『愛知県遺跡地図』には34基が登録されている。しかし愛知大学が調査した時点では、9、10

号墳と26号墳から34号墳までが消滅し、23基の古墳の残存することが確認されている。その時に発掘調査されたのは、15、16、22、23、24号墳の5基で、調査期間は1968年(昭和43)3月6、7日および19～28日、調査の主体は新城市教育委員会、調査の担当は歌川學氏(当時愛知大学教授)、大参義一氏(当時愛知大学講師)で、参加者は愛知大学歴史学研究室学生、新城市郷土研究会会員、新城市小、中、高校教員および生徒有志であった。



第1図 川田原古墳群の位置

3 川田原 22 号墳

古墳の概要

22 号墳は川田原台地の東縁にあり、南南東に向いた傾斜面に立地し、15、16 号墳の東北方約 130m のところに位置する。調査時の古墳の状況（写真 1）は、23 号墳とともに草地の中に高さ約 0.9m の円丘として遺存し、墳頂には南北に 10 個の石が露出し、そのう



写真 1 22 号墳（右）、23 号墳近景（調査前）

ちの 7 個は、その大きさから天井石とみられる。現況では古墳はすでに削平され、その後建てられた工場の敷地として使用されており、痕跡をうかがうことはできない。

発掘日誌抄

3 月 6 日 23 号墳とともに墳丘の測量を行う。22 号墳は午後 2 時に作業を終了する。

3 月 19 日 発掘を開始する。表土層がすでに剥がれていたため、石室の概観が確認された。南北方向に墳丘を掘り下げ、午後 5 時近くに奥壁の鏡石および側壁を検出した。

3 月 20 日 昨日に引き続き、天井石および側壁の確認調査を行い、清掃の後に実測する。墳丘の東西方向にも調査区（トレンチ）を設け、葺石が 2 段出土する。

3 月 22 日 午前中にチェーンブロックを使って天井石を持ち上げ、玄室、羨道部、前庭部の土を排出する。午後にも引き続き清掃作業を行い、敷石を検出する。前庭部より平瓶

の底部、提瓶の身部、玄室より須恵器の壺の底部や破片を検出する。古墳の規模は奥壁より前庭部まで約 11m、玄室の幅約 1.5m で、玄室入り口の左右には大きな立石が据えられている。

3 月 23 日 昨日に引き続き、内部の土砂を排出し、玄室と羨道部の清掃を行い、敷石を検出する。閉塞石および前庭部も清掃を行い、玄室内と詰石の実測を始める。遺物は石室内から須恵器の坏の蓋と身の断片、壺の断片、羨道部から骨片、鉄鏃断片、土師器断片、須恵器の坏の蓋片が出土した。実測は玄室内の敷石と詰石をそれぞれ半分終了する。

3 月 24 日 石室と羨道部、および前庭部の詰石の清掃を行う。遺物は少なく、D トレンチから須恵器片 2 点のみが出土した。側壁図、詰石の平面図、および玄室の断面図と平面図の実測を終了。B、C、D のトレンチを各 100cm 掘り下げ、B トレンチでは整然とした葺石は発見されなかったが、C トレンチでは 1 段、D トレンチでは 2 段の葺石が検出された。

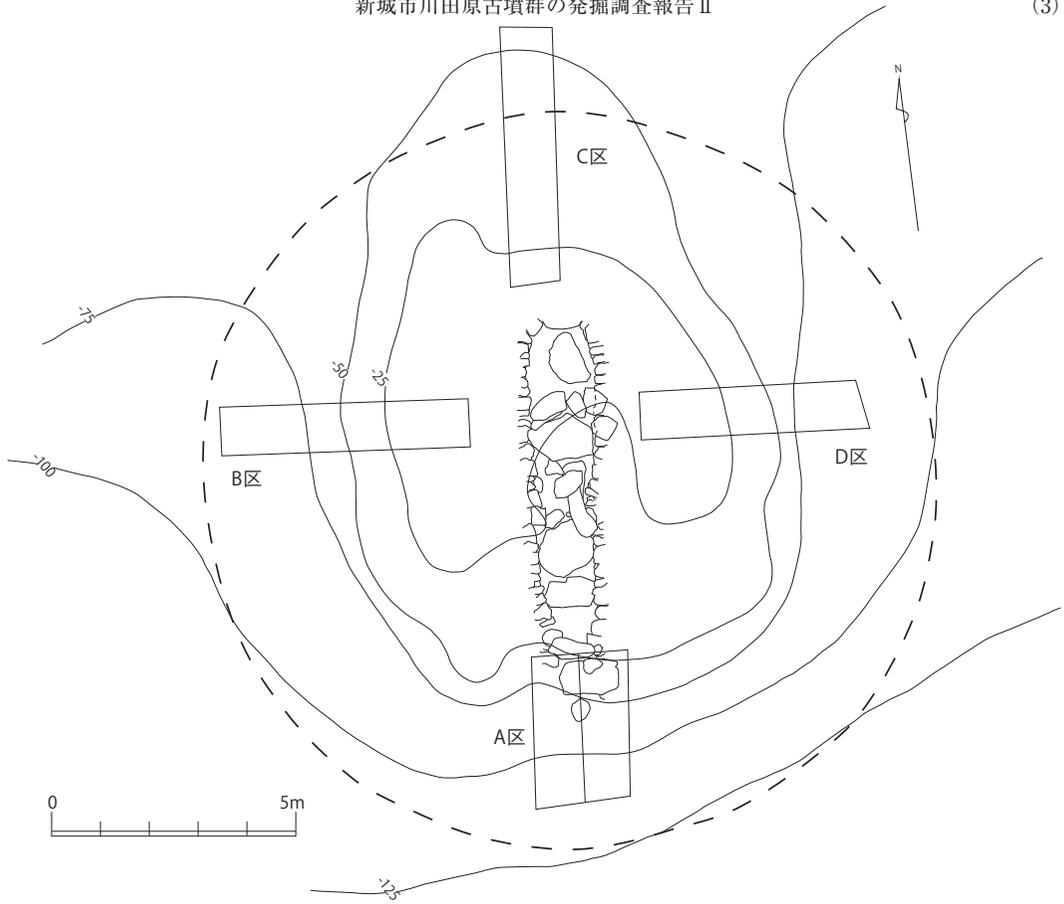
3 月 26 日 玄室の側壁、羨道部の断面、および詰石の実測を行う。B、C、D トレンチのセクション図を作成するために清掃を行う。玄室内の実測は半分終了する。

3 月 27 日 玄室側壁の実測と B、C、D トレンチのセクション図を作成する。前庭部の詰石をはずし、その下から鉄鏃片 1 点と須恵器の断片 30 点が出土する。

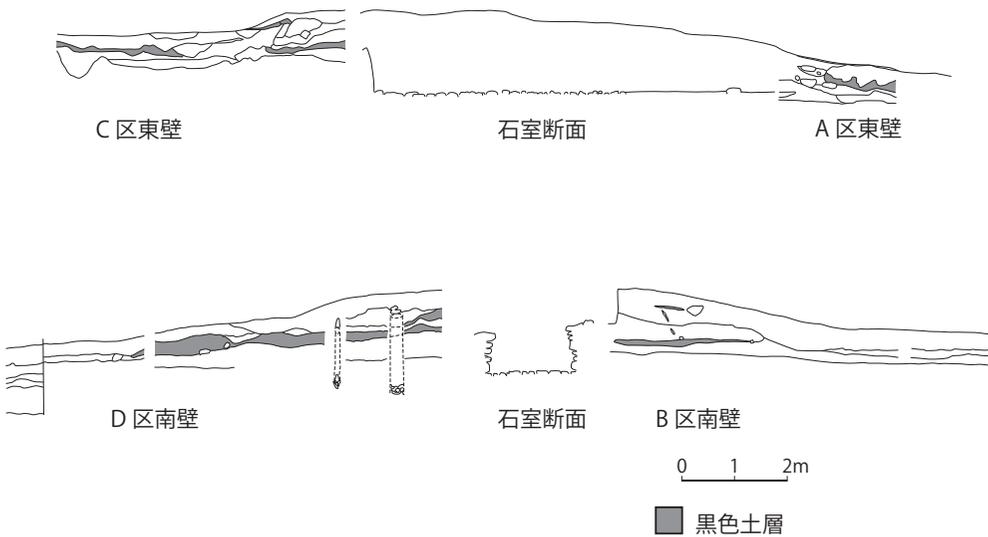
3 月 28 日 詰石の断面図と A トレンチのセクション図を作成。奥壁の下より金環を発見し、前庭部からは清掃後に須恵器断片 20 点を検出した。本日で 22 号墳の調査を終了する。

古墳の墳丘

墳丘の規模は葺石によって直径約 15m の円墳（第 2 図）と推定できる。墳頂部の封土は流失し、また前室の天井石（写真 2）も側



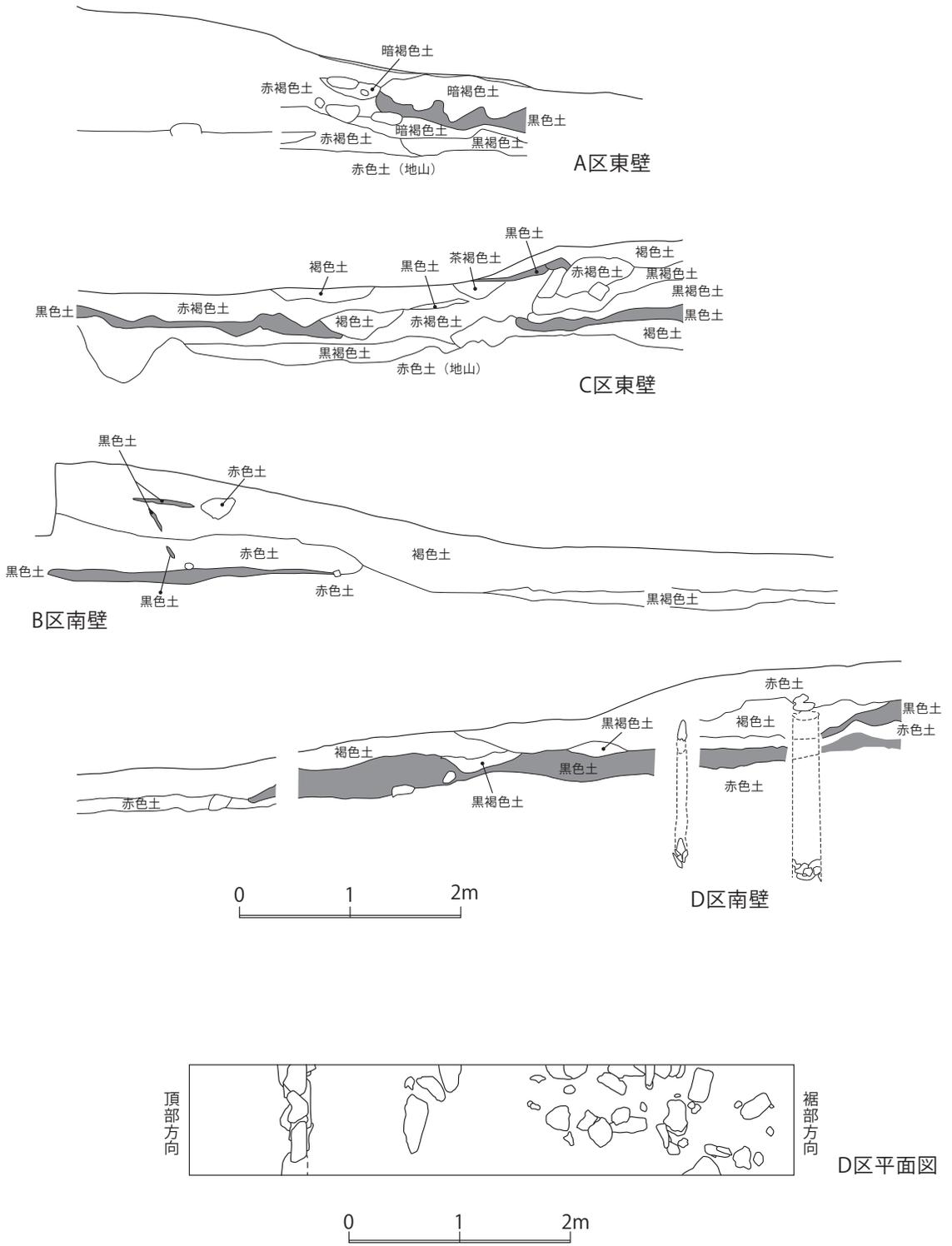
第2図 22号墳丘図および調査区



第3図 22号墳調査区(トレンチ)壁面断面図

(4)

新城市川田原古墳群の発掘調査報告Ⅱ



第4図 22号墳調査区（トレンチ）壁面断面図およびD区平面図

壁の上部と共に石室内に陥没しており、墳丘の高さも確かめられない。しかし石室の残存状態と天井石の大きさからみて、墳頂部は石



写真2 22号墳石室(天井石)

室床面から2.5m以上はあったものと推定しうる。東側のトレンチ(第2図D区)では、中心より2.4mの所に4段の石組があり、さらに外側の3.0m、7.5mの地点に葺石の列(第4図D区平面図)がみられ、この間に不整な石の配列があった。しかし北(第2図C区)と西(第2図B区)のトレンチでは、一部を除いて葺石はみられず、地形的に急斜面となる東南部にのみ葺石が用いられている。

東西のトレンチ(第2図D区、B区)の壁面には一条の黒土層(第3図、第4図D区南壁、B区南壁)がみられ、これが当時の地表面と考えられる。墳丘の東側の裾では黒色土層を削って葺石を施している。一方、西側(第2図B区)では葺石は発見できないが、かなり地山を削り取っている。北側のトレンチ(第2図C区、第3図と第4図のC区東壁)では、幅0.75m、深さ0.5mにわたり地山が掘り込まれており、周湮の存在を思わせるが、その上部に黒色土層のあることから、やや疑問を感じさせる。

以上の点から考えると、当時の古墳の構築に当たっては、地表から0.7m掘り下げて石室を構築し、墳丘の裾を削って形態を整えたと思われる。

内部構造

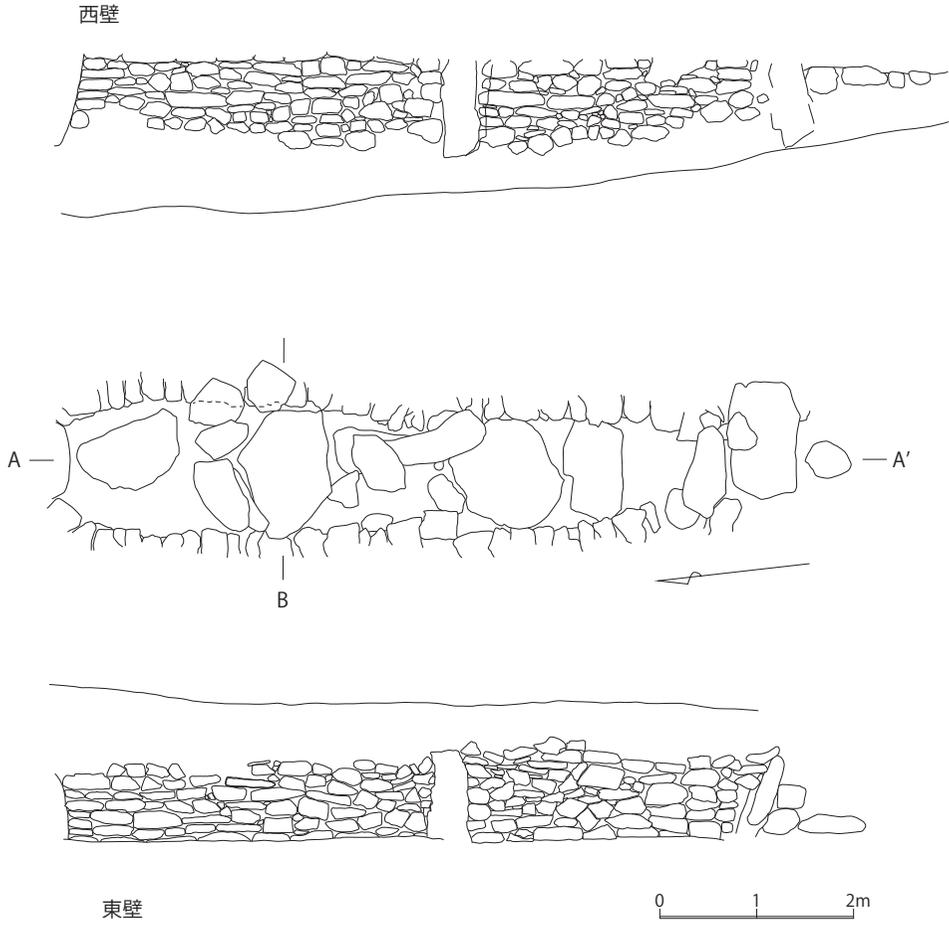
古墳の内部(第5図、第6図、第7図)は横穴式石室であって、前記の如く地表より0.7m掘り下げて構築されている。石室の中心線は真北より西に1°偏している⁽²⁾が、南北方向に設定されたものと考えてよい。左右に置かれた2材の柱状石により玄室、前室、羨道部に分けられ、玄室は長さ3.8m、最大幅



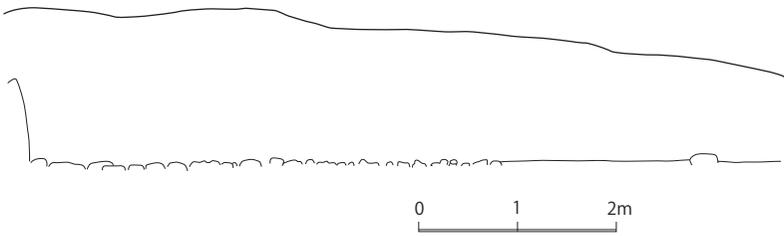
写真4 22号墳石室(玄室から羨道を望む)

1.5m、柱状石の間で0.95m、奥壁部は0.9mでプランは舟形(写真4)を呈する。前室は長さ3.2m、幅1~1.2mのほぼ直線的なプランであり、羨道部は長さ1.6mで朝顔形に外部に向かって開いている⁽³⁾。

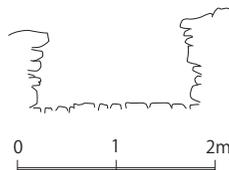
奥壁(写真5)は現存するものは幅0.95m、高さ0.95mであるが、柱状石(1~1.15m)(写真6)より低く、なおさらに1段積み上げた可能性がある。側壁(写真7、8)は上部のものが天井石と共に落ち込んでおり、高さは



第5図 22号墳石室実測図



第6図 22号墳石室断面図 (A-A'面)



第7図 22号墳石室断面図 (B-B'面)



写真5 22号墳石室（玄室から奥壁を望む）



写真8 22号墳石室（東壁）



写真6 22号墳石室（玄室入り口から羨道を望む）



写真3 22号墳石室詰石



写真7 22号墳石室（西壁）



写真9 22号墳遺物出土状況

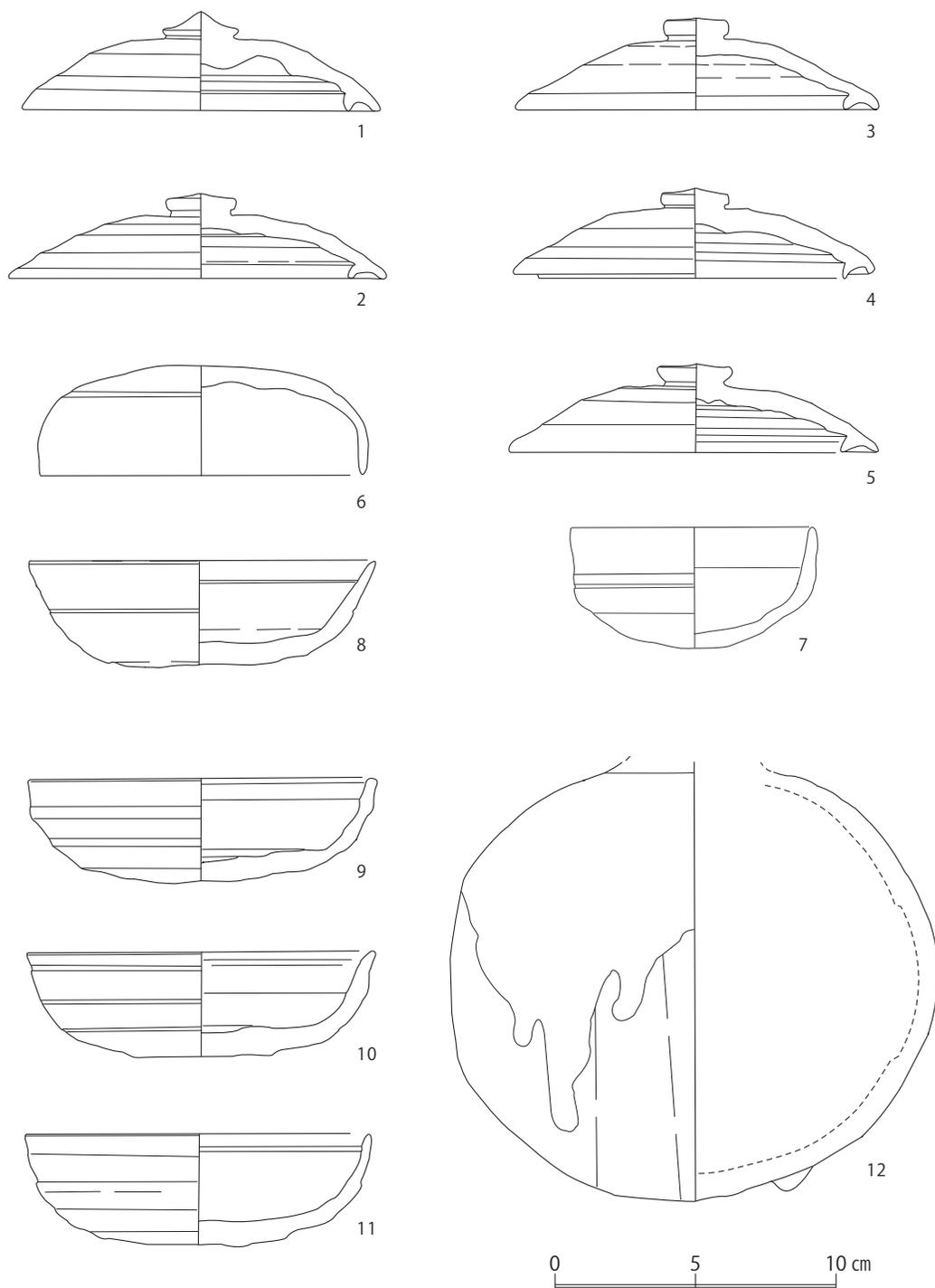
確認しえないが、現存するものの最高は1.1mであり、若干上部が円形にせり出す。天井石は前記の如く陥没した状態でみられるが、最大のもは1.45m×0.9mであり、いずれも長さ1mをこえるものが7個存在した。

玄室の内部の床面は全面に敷石が施されている（写真4）が、奥壁より2.6mまでは比較的大きな石を用い、これより前室にかけての2.3mの間はより小さな石を用いる。或いは二次的な敷石とも考えられる。前室の入り口に2個の平石を置き、この上に数段の石を

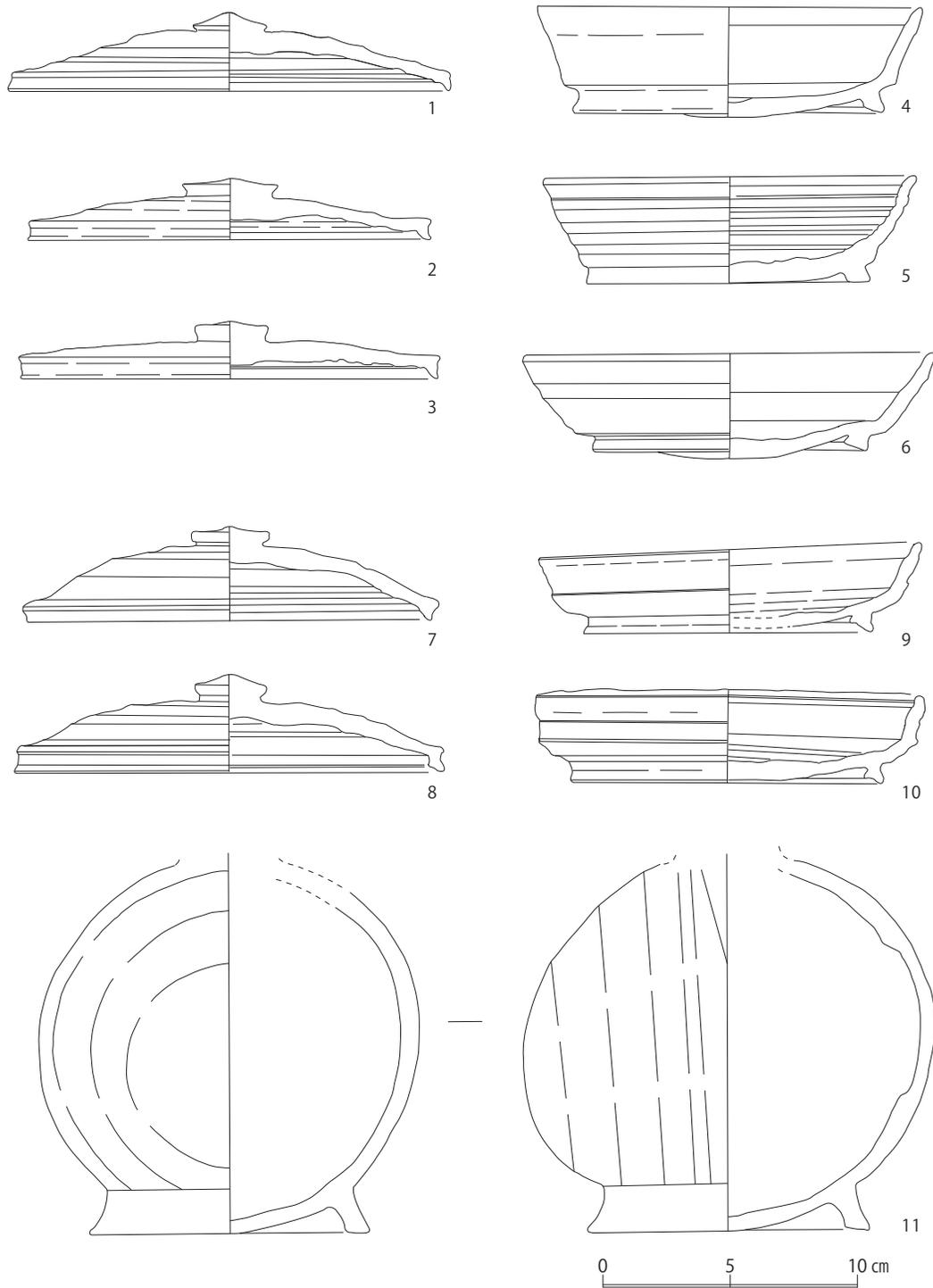
積んで閉塞し、羨道部は詰石を施している（写真3）。

出土遺物

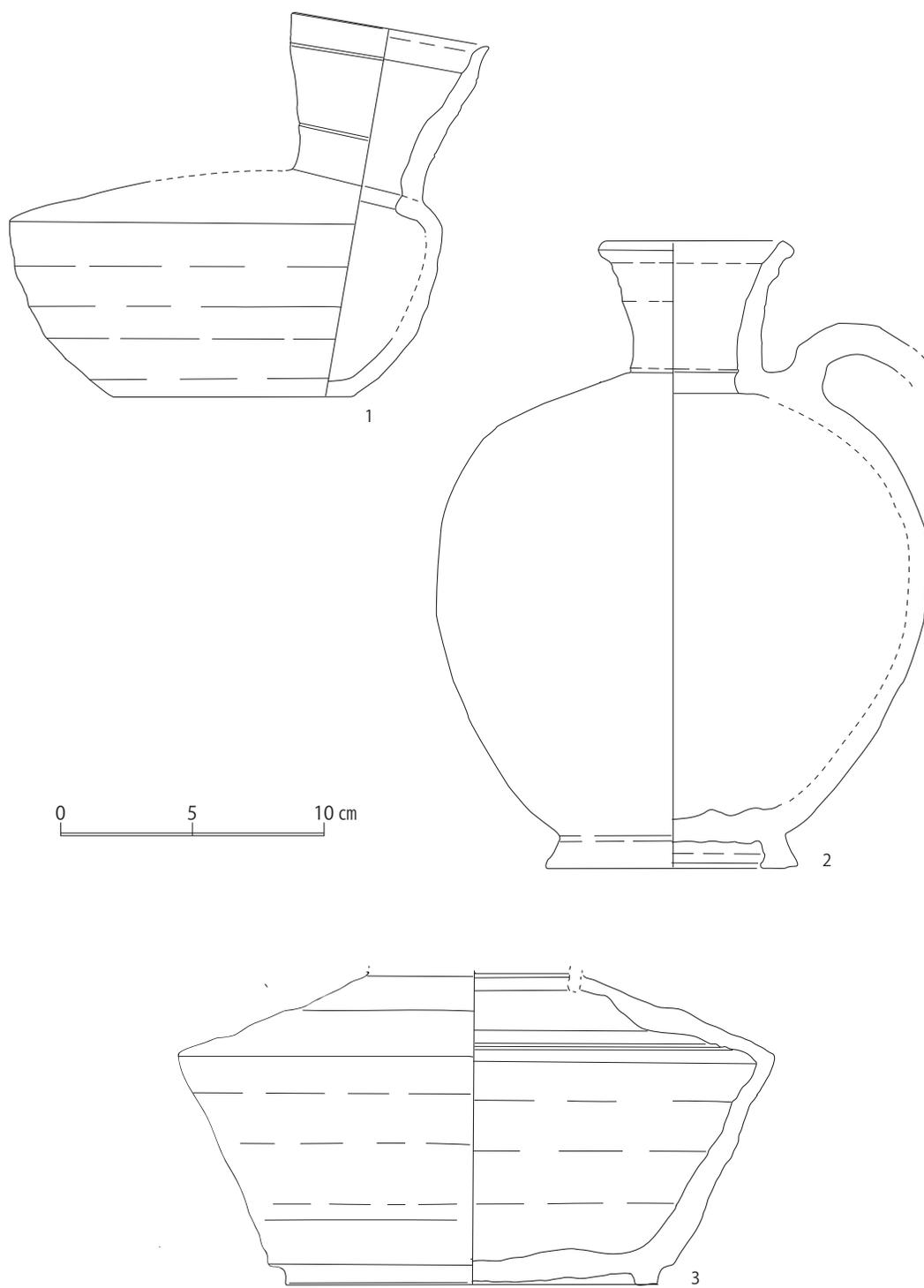
22号墳の出土遺物（第8～11図、写真10～13）は、奥壁部から金環1個、石室内および前庭部から多数の須恵器とその断片、羨道部からは須恵器の他に土師器の断片や、鉄鏃片、刀子片、骨片若干などが出土している。しかし、これらの出土状況については、写真は残されている（写真9）が、その地点を記



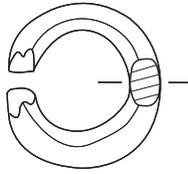
第9図 22号墳出土遺物（土器）実測図



第10図 22号墳出土遺物（土器）実測図



第11図 22号墳出土遺物（土器）実測図



第8図
22号墳出土遺物（金環）実測図（実大）



写真10 22号墳出土遺物（金環）

録した石室などの平面図がみあたらず、また遺物台帳にも不備な箇所のあるものがあり、ここでは、出土状況が確認されるか推測できるもの、および実測可能な金環と土器（須恵器）を取り上げた。

金環（第8図、写真10） 玄室の奥壁から15cm程度離れた床面上から出土した。銅製で鍍金され、一部にその痕跡がみられる。縦2.2cm、幅2.0cm、厚0.65cmである。

土器（須恵器） 出土した土器には須恵器と土師器があるが、そのうち土師器は小片で実測図の作成が困難であり、本稿では作図の可能な須恵器26個について記載する。これらの須恵器は7世紀後期、7世紀末から8世紀初頭、8世紀中ごろのおおよそ3時期に分類されるので、それによって記述する。

(1) 7世紀後期の須恵器（第9図、写真11、写真12-1、2） 完形およびほぼ形状のうかがわれるものが12個ある。

坏蓋（第9図1～6、写真11-1～6） 宝珠形の鈕の付くものと付かないものの2種類がある。

宝珠鈕坏坏蓋（第9図1～5、写真11-1～5）

1（写真11-1）は灰青色堅質で、頂部に三角錐状の宝珠鈕を付す。表裏両面に轆轤痕と篋による調整痕がみられる。裏面の口縁部に坏身を受けるための凹みを一条めぐらす。高3.6cm、口径12.8cm。2（写真11-2）は灰白色堅質で1よりやや低い宝珠鈕を有するが、形状はほぼ同様である。高3.1cm、口径13.1cm。玄室内の床面近くで出土している。3（写真11-3）は灰白色堅質で、扁平な宝珠鈕を有する。形状は1と同様であるが、裏面の口縁部の内側の返りが折り返し気味である。高2.7cm、口径12.9cm。4（写真11-4）は灰白色堅質で扁平な宝珠鈕を有し、形状は3とほぼ同様である。表面に自然釉がかかる。玄室入り口の立柱石付近から出土した。高2.4cm、口径12.9cm。5（写真11-5）も灰青色堅質で、平坦な宝珠鈕を有し、形状も4とほぼ同様である。高3.4cm、口径12.8cm。

坏蓋（第9図6、写真11-6） 側面の大部分を欠失した宝珠の付かない坏蓋である。緩やかに膨らむ天井部から側面に移行する部分に篋による沈線を1条施す。天井部表面に半分程度自然釉がかかる。裏面には轆轤の痕跡がみられる。高4.2cm、推定口径11cm前後。

坏身（第9図7～11、写真12-1、11-7～10） 上記の蓋に対応するものと、それよりやや小型のもの2種類がある。7（写真12-1）は灰白色堅質の小型の坏身で、やや丸味を帯びた平底を有し、身部から垂直に近い側面に移行する部分に2本の沈線を巡らして突帯を作り出している。身部は篋削りを施し、底部も篋で調整する。高4.4cm、口径8.7cm。8（写真11-7）は灰白色堅質で、1～6の坏蓋のいずれかに対応する大きさの坏身である。やや盛り上がった底を有し、側面は緩やかに外反する。側面中央に沈線を1条巡らす。内外面ともに轆轤の痕跡がみられ、底面にも顕著にみられる。高3.9cm、口径12.1cm。玄室内の床面近くで出土している。9（写真11-8）は灰白色堅質で、側面は緩やかに外反



写真 11 22号墳出土遺物（土器）



写真12 22号墳出土遺物（土器）



写真13 22号墳出土遺物（土器）

し、側面には沈線を巡らし、内面の口縁部付近にも沈線を巡らす。底面もやや盛り上がった平底である。玄室内、立柱石付近で出土している。高3.7cm、口径14.8cm。10（写真11-9）は灰白色堅質で、側面は緩やかに外反し、沈線を施している。内面の口縁付近にも沈線を施す。底面もやや盛り上がった平底である。玄室内立柱石よりやや奥よりの床面近くで出土している。高3.7cm、口径12.1cm。11（写真11-10）は灰白色堅質で、側面は緩やかに外反し、2、3か所に沈線を段状に施す。底はやや盛り上がった平底で、轆轤の痕跡が顕著である。

細頸瓶（第9図12、写真12-2）頸部を欠失し胴部のみが残存するフラスコ形の瓶である。胴部はやや横長の球形で、前面に縦方向に轆轤の痕跡や篋の調整痕がみられ、側面の片方のみ、篋でやや平たく調整されている。底部は丸底である。胴部上半部から中ほどにかけて自然釉が垂れかかっている。残高15.8cm、胴部長径16.8cm、短径15.6cm。

(2) 7世紀末～8世紀初頭の須恵器（第10図、第11図1、写真12-3～8、写真13-1～6）

坏蓋（第10図1～3、写真12-3～5）1（写真12-3）は灰青色堅質で、7割程度が残存する。頂部に三角錘状の宝珠鈕を付す。口縁部先端を僅かに折り曲げ、側面は垂直状になる。表面に篋削りの調整痕がみられる。高2.7cm、口径17.3cm。前庭部で出土している。2（写真12-4）灰白色堅質で、僅かに尖る宝珠鈕を付す。形状は1とほぼ同様であるが、側面はやや窪む。表裏両面に轆轤痕がみられる。高2.15cm、口径15.8cm。3（写真12-5）は灰白色堅質で、扁平に近い宝珠鈕を付す。形状は2とほぼ同様である。羨道部で出土している。

坏身（第10図4～6、写真12-6～8）上記の坏蓋に対応する坏身である。4（写真12-6）は灰青色堅質で、高台を付している。篋で調整され、身の下半部がやや窪み、底部はやや膨らみをもつ。高台の接地部の断面は

内側に向かって削られ、緩やかな三角形を呈している。口縁部の内側は篋を当て調整している。高4.6cm、口径14.8cm。5（写真12-7）は灰青色堅質で、底部は丸味を帯び、高台と同じ高さで接地する。内外とも篋削りによる痕跡が顕著で沈線もみられる。高台の接地部は平坦である。羨道部の床面近くで出土している。高4.0cm、口径15.2cm。6（写真12-8）灰青色堅質で4割程度残存している。側面は前二者より緩やかに外反する。底部は丸味を帯び、高台より突出している。高台の断面は接地面の内側が削られ、三角形を呈している。

台坏細頸瓶（第10図11、写真13-5）灰白色堅質で頸部を欠失し、胴部と高台が残存する。胴部はやや下膨らみの球形で、縦方向に轆轤痕があり、さらに鋤状のもので調整したとみられる痕跡もある。また、胴部を球形に成形した際に、その頂部を篋で調整したとみられるやや平坦な面も観察される。高台の断面の内側は篋削りにより、やや窪む。残高15.1cm、胴径15.2cm、底径11.2cm。

平瓶（第11図1、写真13-6）灰白色堅質で、良質の粘土を用いて成作されている。頸部の半面、胴部上面の半分以上を欠失する。胴部の上半部、下半部ともに轆轤痕が残り、下半部の側面は篋削りの調整痕がみられ、底部も篋で平たく削られている。頸部にも轆轤痕が残り、上部と下部には沈線が各1条施されている。頸部と胴部上面には自然釉がかかっている。前庭部から出土している。高15.1cm、胴径16.1cm、底径16.1cm。

以上の坏蓋と坏身、台付細頸瓶および平瓶の時期は、7世紀末から8世紀初頭のうち比較的古い7世紀代とみられ、台付細頸瓶については7世紀後期に遡る可能性もある。また、以下に記す坏蓋と坏身4個は8世紀代の新しい時期に属する。

坏蓋（第10図7、8、写真13-1、2）7（写真13-1）は灰白色堅質で、半分程度が欠失している。三角錘状の宝珠鈕を付し、表裏両面

に篋削り痕がみられる。羨道部で出土している。高34cm、推定口径16cm。8(写真13-2)は灰青色堅質で三角錐状の宝珠鈕を付す。表裏両面に荒く篋で調整された痕跡がみられる。表面に自然釉がかかっている。高4.1cm、口径17.3cm。

坏身(第10図9、10、写真13-3、4)上記の坏蓋に対応するものである。9(写真13-3)は灰青色堅質で、高台を有する。側面の中央やや下方が窪み稜線をなしている。内面の上方で口縁部近くのところもやや窪む。高台の断面は三角形を呈する。高3.7cm、口径14.8cm。10(写真13-4)は灰青色で灰白色がかり、底部は灰白色である。側面は垂直に立ち上がり、沈線を2条巡らし上、中、下の3帯に分けている。高台の断面は三角形を呈するが、やや窪んで凹面もみられる。高3.8cm、口径14.8cm。

(3) 8世紀中ごろの須恵器 提瓶と長頸壺の2個がある。

提瓶(第11図2、写真13-7) 灰青色堅質で、胴の片方の部分や頸部の半分を欠失する。楕円形の胴部に頸部と高台を付し、肩部の一方に先端の欠けた耳が付く。片側の頸部から高台部まで全般に自然釉がかかる。また、高台から底部の外側に全面に釉薬がかかっている。これは焼成時に、底部と窯の床面に何かを当てがってできた隙間に下方から火が回り込み釉薬が降りかかったか、または器体が転倒して、底部が火に触れ同様に釉薬が降りかかって生じたと考えられる。前庭部の埋土の中から出土した、高24.8cm、推定頸部口径7.0cm、推定胴部径17.9cm、底径9.4cm。

長頸壺(第11図3、写真13-8) 灰白色堅質の頸部を欠失した長頸壺で、高台を付している。胴部は肩部をくの字に強く張り出させており、その上面には自然釉がかかる。また下半部にも一部自然釉が流れている。胴部全面に轆轤痕がみられ、底面には篋削りによる調整痕があり、また、胴部内面の底部にも

自然釉がみられる。玄室中央付近の床面に近いところで出土している。残高11.7cm、胴径21.8cm、底径14.3cm。

4 小結

川田原古墳群は川田原台地上に位置する古墳時代後期の古墳群で、かつては36基の古墳が知られていたが、1968年(昭和43)に愛知大学が調査した時には、すでに11基が消滅していた。本稿に記載した22号墳は、当時調査した5基のうちの1基で、前回報告した15、16号墳からは東北方に約130m離れている。この古墳は15、16号墳と同じく川田原古墳群の中の中央部の一群に属し、そこから東へ約40m先には23号墳が近接して位置している。

古墳の規模は高さ2.5m以上、直径約15mの円墳と推定される。内部構造は中心軸を真北から西へ約1°偏した横穴式石室で、玄室、前室、羨道部からなり、玄室と前室を合わせた長さは約7m、最大幅1.5m、羨道部は長さ1.6mである。石室の平面プランは敷石を実測した図面が見つからないので、詳述できないが、中央部付近が膨らみ、舟形を呈している。また前室と玄室の境界付近には左右の側壁に接してそれぞれ立柱石を配しており、東三河地方に分布する三河型古墳といえることができる⁽⁴⁾。

出土遺物は須恵器が大部分を占める。これらは湖西地方の窯で焼成されたとみられ、7世紀後期、7世紀末から8世紀初頭、8世紀中ごろの3時期に分類される。須恵器の出土地点については、それらを記録した石室の実測図がみあたらず、また遺物台帳に記された遺物番号と実際に遺物に記された番号が一致しないものもあり、更なる検討が必要である。確実と思われる事項から判断すると7世紀後期のものは玄室内の前方に置かれるものが多いようであり、7世紀末から8世紀初頭のもののは前室内と羨道部から出土している。また、

8世紀中ごろのものは、1点は前庭部(羨道部)から、1点は玄室内から出土している、7世紀後期の須恵器については、近年、奈良県の飛鳥地域の石上遺跡の調査から、湖西窯で焼成された坏身が天武、持統朝の時期の地層から検出されており⁵⁾、それに類似したものが、この古墳でも出土しているため、その時期にまず、最初の被葬者が玄室内に埋葬されたと考えられる。ついで、7世紀末から8世紀初頭の間に追葬が行われたと考えられる。8世紀中ごろ(8世紀第2四半期)の須恵器は発見された場所が異なるので、正確なことはいえないが、なんらかの祭祀が行われたとも推測される。

22号墳の性格付けを行うには、まだ探し出されていない調査記録があり、これから発見されることを期待しながら、また同時に調査したその他の古墳とも対比して、今後を進めていきたい。

今回の報文は前号と同様に発掘当時に愛知大学が作成した図面や写真および、その後に整理された実測図と、歌川學氏が執筆され、新城市教育委員会へ提出される予定であった草稿(本稿の2 川田原22古墳のうちの古墳の概要、古墳の墳丘、内部構造)をもとに出土遺物などの項目を追加して作成したものである。歌川氏の草稿には変更、加筆された部分もあるが、文責は筆者にある。

また、図面や遺物の再整理、実測図の作成、写真撮影などにあたっては、玉井力(総合郷土研究所非常勤所員)、廣瀬憲雄(同所所員)、榎原将人(同所研究員)、森田亮子(同所研究員)、朝倉留美(同所臨時職員〔当時〕)、水野多栄(名古屋古代史研究会会員)の各氏にご協力いただいた。なお、土器の年代等については尾野善裕氏(奈良文化財研究所)、

参考資料や文献については岩原剛氏(豊橋市文化財センター)にご教示いただいた。ここに記して感謝の意を表します。

註

- (1) 井口喜晴「新城市川田原古墳群の発掘調査報告 I 一川田原15、16号墳一」(『愛知大学総合郷土研究所紀要』第62号、2017年)。
- (2) 第2図22号墳墳丘図および調査区と第5図22号墳石室実測図に示された方位は磁北を表す。それらの原図に記された方位は一致しない部分があるので、歌川氏の報文原稿の「石室の中心軸は真北より西に1°偏している」に従って、各図面の表記を修正し統一した。
- (3) 石室実測図については、発掘日誌によれば敷石を記した平面図が作成されているが、今回は発見できず、天井石とともに書かれた平面図を採用した。
- (4) 岩原剛「三河の横穴式石室 一三河型横穴式石室の生成と伝播を中心に一」(和田晴吾先生還暦記念論集刊行会編『吾々の考古学』同刊行会、2008年)。
- (5) 尾野善裕、森川実、大澤正吾「飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器」(『奈良文化財研究所 紀要2017』2017年)。

